

<調査研究シリーズ 94>

メコンデルタ地域における参加型労働 安全衛生教育の現状

— メコンデルタ 2010 国際研修の参加報告 —

中 地 重 晴

1. はじめに

ベトナム社会主義共和国のカント市では、ECHO (Center for Occupational Health and Environment Can Tho Health Department: カント省労働衛生環境センター) を中心に、10年前から日本の財団法人労働科学研究所と特定非営利活動法人東京労働安全衛生センターの研究者の協力のもとに、ILO (国際労働機関) が提唱し、普及活動を推進している参加型労働安全衛生教育、POSITIVE (Participation-Oriented Safety Improvements by Trade-Union Initiative) を発展し、地域に根差した農民向け労働教育プログラム WIND (Work Improvement in Neighbourhood Development) や WIPE (Work Improvement for Protection of Environment) と呼ばれる参加型労働者環境教育プログラムを開発し、毎年近隣諸国 (韓国, 香港, タイ, カンボジア, ラオス, バングラディッシュ, 日本など) から産業医学や労働衛生の研究者, 労働組合の活動家などが参加した国際研修ワークショップを開催してきた。

筆者は、2010年8月に開催されたメコンデルタ 2010 国際研修ワークショップに参加してきた。第10回国際研修ワークショップの開催ということで、10周年記念事業として国際シンポジウムも開催され、活動の総括と今後の発展に関する議論がなされた。また、筆者は、2005年にWIPEプログラムの開発に協力した経験もあり、今回も報告の機会が与えられた。メコンデルタ地域における参加型労働者教育プログラムの経過をまとめるとともに、メコンデルタ 2010 の内容を紹介し、今後の計画と展望について報告する。なお、今回の参加費用は海外事情研究所より助成を受けた。

2. 参加型, 自主対応型労働者教育とは

1980年代から急速な技術革新の進捗, パソコンの導入により, 労働現場における労働安全衛生は大きな転機を迎えた。あらゆる産業で労働態様に大きな変化がもたら

され、職場の危険有害条件も大きく変化した。近代からの危険な作業・肉体負担の大きい作業は機械化、自動化に置き換えられた反面、今までになかった作業工程が出現し、機械や化学物質による危険、複雑なコンピュータ関連作業や責任の重いストレスによる健康への影響、メンタルヘルスなど、新たに対処すべき問題点も出現してきた。こうした問題点が明るみに出るのを待って、一つ一つ対策を講じていくのは遅すぎる。もっと積極的に職場の力と知恵を合わせて、先手を打っていかなければいけないことは自明のことである。予防原則としてEUでは定着した考え方と取組み¹⁾がある。

安全で健康な職場づくり、人としてふさわしい労働生活の実現を目指す労働安全衛生活動の新たな取り組みが模索された。1919年に創設されたILOは、労働者保護に関する国際基準の設定と労働問題解決に実際に役立つ情報の提供に努めてきた。労働安全、衛生、作業条件に関連する条約、勧告を行ってきた。たとえば、1919年の第1号条約では、労働時間は1日8時間、週48時間を超えるべきではないと規定し、各国の労働法制と労働時間に影響を及ぼしてきた。1981年には第155号条約で労働安全衛生の労働者の3つの権利(参加する権利、知る権利、就労を拒否する権利)を定めている。

1976年に発足した労働安全・衛生・作業条件改善のための国際計画(PIACT)では、作業場の安全・衛生・労働時間の長さやその他の問題点の改善、作業編成と作業内容、技術の選択、労働者の福利厚生のためのサービスと施設など、広範な領域にわたって、「労働の人間化」が検討された。1974年にスウェーデンでは産業合同安全審議会が労働者向けに労働安全衛生、作業条件の改善方法に関する教本を作成し、労働者やその他の人たちが小グループで自分たちの置かれている状況と改善方法を討議する方法で、職場を改善していき、成果を収めた。

この参加型、自主対応型労働者教育の教本は、1978年スウェーデン産業合同安全審議会が、国際金属労連とともに作成した。発展途上国の労働者向け教本として英語、スペイン語、ポルトガル語で刊行された。1982年にはILO事務局がPIACTの目的に沿う形で改定版を作製し、発展途上国の経営者、現場監督者、労働者、安全管理者、その他の人たちのための教育研修のための教本として普及させた。

日本においても小木和孝、天明佳臣監訳で日本語版²⁾が労働科学研究所より発行され、小グループによる参加者の討論と職場巡視点検を組み合わせた新しい労働安全衛生教育プログラムが開始された。自治労や全国金属機械労働組合など総評、連合系の労働組合の労働安全衛生活動の中心的な取り組みに発展していった。³⁾

1) 欧州環境庁編：レイトレススズ14の事例から学ぶ予防原則，松崎早苗監訳，七つ森書館，(2005)

2) ILO スウェーデン合同産業審議会編：安全、衛生、作業条件トレーニング・マニュアル，小木和孝，天明佳臣監訳，(財)労働科学研究所，(1990)

3) たとえば，自治労では，組合員と研究者とで自治体労働安全衛生研究会を組織し，会報の発行，

一方、この参加型、自主対応型労働者教育プログラムは、本来発展途上国の労働者向けに作成されており、日本における活用事例をもとに、発展途上国の労働者教育プログラムの開発を国際協力の一環として取り組もうという動きが現れた。たとえば、連合が設立した JILAF (国際労働財団) による POSITIVE (Participation-Oriented Safety Improvements by Trade-Union Initiative) は、労働組合のイニシアティブによる参加型実践重視の労働安全衛生改善を意図した名称である。POSITIVE プログラムは、労働組合による労働安全衛生活動を促進するための参加型実践重視の訓練プログラムとして開発された。プログラムは、国際労働財団 (JILAF) のサポートにより、アジアの 10 カ国のナショナルセンター (労働組合の中央組織) によって実施されてきた。⁴⁾

JILAF のような大きな組織とは独立し、この間、アスベストやじん肺などの労働安全衛生問題に取り組んできた東京労働安全衛生センターが、小木和孝氏、川上剛氏 (ILO バンコク事務所) の協力のもとで、カント市で参加型自主対応型労働者教育プログラムの実践を 2000 年からメコンデルタ国際研修プログラムとして実施してきた。

3. メコンデルタ国際研修プログラムとは

メコンデルタ国際研修運営委員会は、2000 年 3 月労働科学研究所、東京労働安全衛生センター、カント省労働衛生環境センター三者合意の下に発足した。

その目的は、メコンデルタで、ECHO が ILO バンコク事務所の協力の元に、1990 年代半ばから行なわれている中小企業の参加型労働改善活動 WISE (Work Improvement in Small Enterprises) や、農業の参加型労働生活改善活動 WIND (Work Improvement in Neighbourhood Development) から学ぶことと、東アジア、東南アジア諸国からの参加者の経験を交流することにより、メコンデルタ国際研修の経験を各国に持ち帰り、参加型活動に活かすことであった。

メコンデルタ国際研修でも実践されている参加型労働者教育プログラムは PAOT (Participatory Action-Oriented Training) と呼ばれている。PAOT 研修は、カント市及びメコンデルタ地域からの参加者は WIND などの労働生活改善活動を学び、研修に参加した各国の参加者、研究者と労働組合の活動家はファシリテーターの役割を学ぶ (Training of Trainers) という二つのプログラムが同時進行する。トレーニングキット (教材) には、アクションチェックリストと良好事例写真集があり、すべてメコンデルタ現地の良好事例を基礎に作られている。この 10 年間でのべ 280 名、14 ヶ国の人々が参加した (表 1)。メコンデルタ国際研修参加後、ベトナム、日本、韓国、バング

自主対応型労働者教育の研修会、リーダー養成講座などを開催している。

4) JILAF の POSITIVE プログラムの詳細は、<http://www.jilaf.or.jp/genpro/positive/> に詳しい。

表1 メコンデルタ国際研修の歴史(メコンデルタ国際研修ホームページより作成)

年月	メコンデルタ国際研修	メコンデルタ参加者のPAOTプログラム開発	
2000年	1月	メコンデルタ国際研修計画始動	
	3月	メコンデルタプログラム日本運営委員会発足	
	8月	メコンデルタ2000 18名(日本, ベトナム)	東京労働安全衛生センターと全建総連東京都連が協力し, 建設現場改善活動を開発
2002年	3月	メコンデルタ2000 18名(韓国, タイの初参加)	
2002年	9月		韓国安全衛生公団でのWISEプログラム
2003年	8月	メコンデルタ2003 12名	
	11月		トヨタ財団アジア隣人ネットワーク助成の下, ハノイ参加型改善活動国際ワークショップ
2004年	8月	メコンデルタ2004 26名	
2005年	8月	メコンデルタ2005 26名(バングラデシュの初参加)	トヨタグローバル500助成の下, 環境保護プログラムWIPE実施(2005~2006年)
2006年	8月	メコンデルタ2006 33名(ネパールの初参加)	トヨタ財団アジア隣人ネットワーク助成の下, バングラデシュ精密産業労働生活改善プログラムGRAINS実施(2006~2007年)
2007年	8月	メコンデルタ2007 44名	トヨタ財団アジア隣人ネットワーク助成の下, APPLEアスベスト予防プログラム実施(2007~2008年)
2008年	8月	メコンデルタ2008 35名(セネガル, アメリカ, オーストラリアの初参加)	日本介護労働改善プログラムWINC実施(2007年~)
2009年	8月	メコンデルタ2009 35名(カンボジア, ラオス, ロシア, キルギスタンの初参加)	トヨタグローバル500助成の下, 農業環境保護プログラムGREEN実施(2008~2010年)
2010年	8月	メコンデルタ2010 48名(香港の初参加)	韓国順天郷大学と農業省協力の下, WIND KOREA実施(2009年~)

ラデシュで10種類の異なった参加型改善プログラムが作られるという成果があがっている。

4. メコンデルタ国際研修の方法の紹介

メコンデルタ国際研修は1週間, 正確には4泊5日の研修プログラムである。その内容を図1に示す。以下, 簡単に紹介する。

1日目は労働衛生の専門家であるILOでプログラムの開発段階から関わってきている小木または川上, カイらを講師に, PAOT理論を学ぶ。講義の中で, 人々の改善活動を促進するには, 現地で行われている安全保健や人間工学のルールにそった良好事例を紹介することがもっとも効果的であることが繰り返し強調されるのが特徴であ

る。ベトナムでのトレーニングキットの中で、改善にかかるコストはできるだけ安く抑えることも、いろんな職場に普及させていくために必要なもので、ローコストによる改善についても強調される。

2日目は農村や工場で、現地の人々のためのトレーニングに使う良好事例をグループで収集する。3, 4名の少人数のグループに分かれて、職場や農村を回り、デジタルカメラに紹介すべき良好事例を撮影する。

3日目は引き続き、少人数のグループで、前日農村や工場で収集した良好事例に基づいたトレーニングキット(教材)を開発し、プレゼンテーションの練習をする。原則として、各グループが講師となり、1時間程度の持ち時間の中で、冒頭の30分程度を使い、テーマに関するゲームや寸劇を行った後、テーマについての良好事例をスライドで紹介しながら、グループ討議の課題を説明するためのプレゼンテーションを作成する。複数の国から参加しているので、グループ討議やトレーニングキットの作成は英語で行い、ベトナム人が翌日の農民や労働者向けの教材用にベトナム語に翻訳する。

4日目、5日目はベトナム人の農民や工場労働者へのトレーニングを実施する。各国からの参加者が、講師としてテーマごとにプレゼンテーションを行い、ベトナム人がグループで討議し、良好事例や改善点について報告する。手書きでまとめたものをデジタルカメラで撮影し、プレゼンテーションの資料として使用する。2日間のセッションを通して、ベトナム人の農民、労働者は労働安全や衛生問題と環境問題を学び、各国からの参加者は、参加型トレーニングに必要なファシリテーション技術を学ぶことになる。

また、最終日には、参加型トレーニング終了後、各国から参加者による活動報告会

どのように学ぶのか?

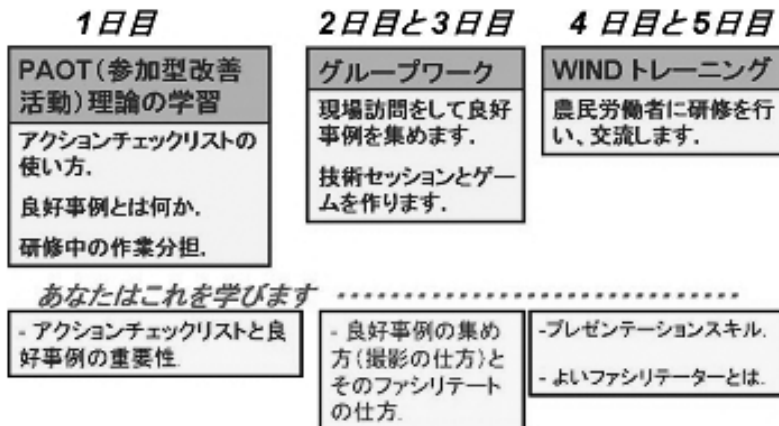


図1 メコンデルタ国際研修のプログラム例(メコンデルタ国際研修ホームページより)

を行い、活動の交流を深める取組みを行う。

メコンデルタ国際研修では、文化交流も盛んに行われる。ウェルカムパーティでは、各国の民族衣装を着た参加者が、昔からの友人であったかのように親しく踊り歌う。ファシリテーターとして自分の思いを伝えるためには、表情による表現、「スマイル」が大切なので、ベトナム人向けのトレーニングでも、笑顔いっぱいのさまざまなパフォーマンスを作る必要がある。歌、ゲーム、ダンスなどで、ベトナム人たちのトレーニング参加意欲を促進する。また、ベトナム人の参加者やスタッフたちも、ベトナム料理や民族芸能を披露する。フェアウェルパーティー（図2）では、それぞれの民族衣装を交換して着たりするほど交流が深まっている。メコンデルタ国際研修では参加者の文化交流を行うことで、さらにPAOTのきずなを強めることを行っているのも特徴である。



図2 フェアウェルパーティーの様子

5. 国際研修のテーマ 労働生活改善の技術の内容

メコンデルタ国際研修では、労働や生活の改善には6つの基本的な技術領域から、総合的に改善活動を考えることを強調している。6つの技術領域とは、1. ものの保管と移動、2. ワークステーション、3. 機械の安全、4. 物理的環境の改善、5. 環境保護、6. 福利厚生と作業編成である。

この分類は、PAOT (Participatory Action-Oriented Training) の広まる中、1998年に国際労働機関 (ILO) が国際人間工学会 (IEA) の協力の下に出版した「人間工学チェックポイント」⁵⁾ に環境保護を加えたもので、マニュアルブックやパワーポイントファイルになって、教材として使えるように編集されている。

それぞれの技術領域は、3つから5つの基本ルールが示されている。そして、各ルールには、5つから8つの具体的な改善対策が示されている。これらの改善対策は、イ

5) ILO 編 小木和孝訳：人間工学チェックポイント、(財)労働科学研究所、(1998)

ラストで書かれ、どのように改善するのが一目で分かるように工夫されている。イラストの後には改善事例が写真で示される。これらはベトナムで作成されたものである。地元の条件で充分に実施できる改善、「良好事例」と呼んでいる。

測定結果や、健康診断結果を応用して改善を行う場合もあるが、良好事例から学び、良好事例を自分の労働や生活にも応用することで改善活動は進む。そしてグループやチームで討議しながら、低コスト改善を段階的に進めることが大切である。メコンデルタの中小企業や農村で行われている参加型改善活動は、地元の実例を改善の目標にしているので、各国の参加者が自国に帰り、どの国でも幅広く応用できるものになる。低コストで改善するように誘導するのが、メコンデルタ国際研修の特徴である。

6. 教材：アクションチェックリストの作成

メコンデルタ国際研修の教材として使用されているアクションチェックリストは、すぐ出来る改善対策を、5から6項目ごとに合計30から40項目にまとめたものがある。各項目はすぐ実施できる改善対策がわかりやすいことばで書かれていて、その横にはイラストが示されている。イラストでどう改善するかが表されているので一目で改善対策が分かるようになっている。その一部を図3に示す。

チェックリストというと、すぐに忘れ物がないか、間違いはないか、などとチェックする一覧リストを思い描くが、このようなチェックリストは、産業安全保健の分野でも、職場安全パトロールなどでよく使われている。

ここでいうアクションチェックリストは、このような問題点を指摘していくチェックリストとは異なる。その現場の状況から見て、その対策を提案するかどうかを記入するために使うものである。メコンデルタ国際研修の後に、アジア各国の参加者は、さまざまなアクションチェックリストを開発し、産業安全保健や地域開発に活用してきた。

日本では、小規模作業場、建設産業、医療・介護労働、事務労働の現場で使用できるものが作成されている。韓国では、生活保護をうけている高齢者の生活改善、農業労働、テレコミュニケーション、スーパーマーケットなどのサービス産業向けに作成された。ベトナムでは建築作業やごみ収集作業などのアクションチェックリスト、バングラデシュでは、精米作業現場用などのアクションチェックリストが作成されている。

図4はアクションチェックリストの改善項目を例示する。まず、改善対策が書かれている。この例では、「通路を広く取って、人やものがスムーズに通れるようにします」という対策が書かれている。そして「この改善を提案しますか？」という質問が続く。この対策がすでに出来ているなら「NO」にチェックする。「NO」は改善が

すでに出来ていることに相当する。この労働生活現場にあるよい点なので、良好事例として学んだという意味にもなる。

改善対策が必要ななら「YES」、改善を提案するにチェックを入れる。「YES」にチェックをつけたら、どのように改善するかについてのアイデアを、備考欄に書き加えてお

I. MATERIALS HANDLING AND STORAGE





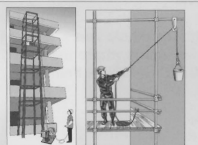
<p>1. Clear and mark transport ways.</p>		<p>Do you propose action? <input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> Priority</p> <p>Remarks: </p>
<p>2. Holes and openings are securely fenced off or provided with fixed, clearly marked covers.</p>		<p>Do you propose action? <input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> Priority</p> <p>Remarks: </p>
<p>3. Remove all projecting nails in timber.</p>		<p>Do you propose action? <input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> Priority</p> <p>Remarks: </p>
<p>4. Use carts, hand-trucks, rollers mobile storage racks and other wheeled devices when moving materials.</p>		<p>Do you propose action? <input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> Priority</p> <p>Remarks: </p>
<p>5. Use hoist, conveyers or other mechanical means for moving or lifting heavy materials.</p>		<p>Do you propose action? <input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> Yes <input type="checkbox"/> Priority</p> <p>Remarks: </p>

図3 アクションチェックリストの例

1- Keep passageways clear and in good condition for the movement of people and materials.

Do you propose action ?
 No Yes Priority

Remarks:.....

図4 アクションチェックリストの改善項目提案の例

くとよい。

すべての項目で「NO」「YES」のチェックが終わったら、「YES」の中で、緊急に改善すべき項目に「優先」度のチェックをつける。アクションチェックリストを使うと、すぐの改善対策を、多領域において提案しやすくなる。

筆者が入手しているアクションチェックリストと労働者教育プログラムは以下の通りである。プログラム名と著者名の順に示す。

主にベトナム向け

WIND (Work Improvement in Neighbourhood Development) programme,
ECHO/ILO/ISL/BROT, (2002)

Follow-up Assessment WIND programme Family Record Book,
ECHO, ILO, ISL, BROT, TOSHC, (2003-2004)

WISCON (Work Improvement in Small Construction Sites) Action Checklist,
ECHO/ILO/ISL, (作成年不明)

WIPE (Work Improvement for Protection of Environment) Workplace Checklist,
ILO/ECHO/TOSHC/ISL, (2004)

PAOT (Participatory Action Oriented Training) Programme, ECHO, (2005)

GREEN (Farmers Actively Participate in the Protection of Environment) Action
Checklist, ECHO, (2008)

WARM (Work Adjustment for Recycling and Managing Waste), JICA/ILO, (2006)

タイ

WISH (Work Improvement for Safe Home) Programme, ILO, (2006)

7. メコンデルタ国際研修の実施体制

メコンデルタ国際研修の実施体制について、運営委員会の構成メンバーをまとめてみた。日本側の運営委員会メンバーは、この間、被災労働者支援や労働安全衛生の専門家によって、構成されている。

特定非営利活動法人東京労働安全衛生センター：

特定非営利活動法人東京労働安全衛生センターの前身は、1985年東京都江東区亀戸で、医療関係者、労働組合、市民の協力を得て東部労災職業病研究会として発足した。その後、1998年に三多摩労災職業病研究会と合同し東京労働安全衛生センターと改名、2001年に特定非営利活動法人として認定、登録された。

主な活動は、1. 労災職業病に罹災した被災者救援活動 (年間 250 件)、2. 労働衛生コンサルタント活動 (年間 30 件)、3. 作業環境測定活動 (年間 50 件)、アジア地域における安全衛生と環境保護活動 (主な支援地域はベトナム、モンゴル、バングラデシュ)

である。

理事長は平野敏夫 (医師, ひらの亀戸ひまわり診療所所長, メコンデルタプログラム日本運営委員会代表) 氏, 専従職員を5名抱えている。⁶⁾ メコンデルタ国際研修の事務局は仲尾豊樹 (第一種作業環境測定士) 氏が中心に活動している。⁷⁾

筆者は2005年にWIPEプログラムの作成に協力し, 2011年の新たなプログラムWINDYの作成に企画委員として参加している。

財団法人 労働科学研究所:

財団法人労働科学研究所は, 1921年に大原財閥によって設立された日本の産業医学, 労働科学をリードしてきた民間の研究機関である。主な活動は, 1. 労働科学に関する研究及び調査・研究者の養成, 2. 学術雑誌, 研究資料その他の出版物の刊行, 3. 講習会, 研修会等の開催を行っている。国際協力活動では, 研究所出身者がILO等に在籍し, 全世界に幅広いネットワークをもっている。所長は, 酒井一博 (理工学博士) 氏, 小木和孝 (医師, メコンデルタ日本運営委員会アドバイザー, 国際産業保健学会会長) 氏, 吉川徹 (医師, 副所長, メコンデルタ日本運営委員会) 氏を中心に国際協力センター⁸⁾として, 国際協力活動を実施している。

ベトナム側の運営委員会はカント省の行政関係者を中心に構成されている。

カント医科大学:

カント医科大学は, ベトナムメコンデルタの中心都市カント市にあるパラメディカルスタッフ養成大学である。メコンデルタ参加型改善活動を進めてきたトンタット・カイ氏が学長になった2007年以降, 学内に参加型改善活動を進めるNGO=GREENが作られ, 農村の労働生活改善活動を進めている。メコンデルタ国際研修では, ベトナム受け入れ側として, 常に中心的に活動している。

カント労働衛生環境センター (ECHO):

ECHOはカント市衛生局に属し, 労働者の健康診断や工場内の作業環境測定を行う組織である。トンタット・カイ氏が所長になった1990年代半ば以降, 参加型労働安全衛生活動開発をメコンデルタ地域で, 積極的に行い, WINDを開発した。WINDは今ILOの支持を得て全世界20ヶ国に広がっている。現在は, カント市内の中小企業の労働者や経営者を対象にした参加型安全衛生改善プログラムWISEを行っている。

カント教育コミュニケーションセンター (ECC):

ECHOから独立して, 安全衛生の機関紙発行及び, メコンデルタ地域の病院・保

6) 特定非営利活動法人東京労働安全衛生センターの活動内容は以下のホームページで閲覧できる。
<http://www.toshc.org/>

7) メコンデルタ国際研修運営委員会の活動は以下のホームページで閲覧できる。
<http://mekongdelta.metoshc.org/index.html>

8) 財団法人労働科学研究所の活動は以下のホームページで閲覧できる。
<http://www.isl.or.jp/ICC/index.html>

健施設が行うプライマリーヘルスケア (予防医学) の支援活動を行うセンターである。かつて、ECHO で参加型改善活動を担っていたスタッフが中心に活動している。

メコンデルタ国際研修の中心メンバーとして活動している人物を紹介すると、トンタット・カイ氏は、1990年代から、ベトナムのメコンデルタ地域で参加型活動を推進してきた医師で、メコンデルタ国際研修の中心人物である。WINDを開発した当時はピタン病院の副院長、その後ECHOの所長としてWISE、WINDを開発、普及させていった。2007年から2010年までカント医科大学長として学校運営にあたりるとともに、学内に参加型改善のNGOを作り、環境保護などWINDの発展的プログラムを手がけた。現在ILO東アジアオフィス(バンコク)に勤務している。

川上剛氏は、労働科学研究所勤務時代にトンタット・カイ氏と知り合い、WIND開発を手がけた医師である。その後、ILOアジア太平洋総局に移動されて、アジア10ヶ国に参加型安全衛生活動を広めると共に、メコンデルタ国際研修を発案し、本プログラムアドバイザーを担当されている。現在はILOジュネーブ本部に勤務している。その前任者に小木和孝氏がいる。小木氏の経歴的は労働科学研究所長、ILOアジア太平洋総局長を勤められた世界の産業衛生学の権威者の一人である。現在国際産業保健学会の会長をされている。

8. メコンデルタ 2010 の内容

2010年8月21日から28日の間、ベトナム社会主義共和国カント市で、第10回メコンデルタ国際研修と10周年記念国際シンポジウムが開かれた。メコンデルタ国際研修のトレーニングの参加者は、韓国、カンボジア、タイ、日本、香港から24名、国際シンポジウム参加者は、これに加え韓国、タイ、日本の6名の代表を加え、ベトナムのトレーニング参加者を含めて80名という大所帯だった。

そのうち日本人参加者は、前述の小木和孝氏、川上剛氏を含め、18名だった。産業医大の医師が3名、学生が2名参加していた。メコンデルタ2010のトレーニングのテーマは、「農民のための環境保護」で、カント市周辺にあるソンハウ社会主義共同農場で、農民夫婦11組22名の参加で行なわれた。

8月21日、主な参加者はホーチミン国際空港に集合し、大型チャーターバスでカント市に向かった。カント市の入口を流れるメコン川には日本のODA援助によって、2009年5月に完成したばかりの巨大なカント大橋がかかり、その川の風景は一変していた。カント大橋建設にあたり、2007年9月、建設中の橋が崩壊し、ベトナム人労働者約60名が亡くなるという犠牲の上に建てられたつらい場所でもある。

翌22日から実際のトレーニングが開始された。メコン川に沿ったニンキウホテルで、開会式が行われた。演壇にはカント国際友好協会レタンハイ会長などが並びはな

やかなものであった。開会式に続いて午前中のセッションが始まり、小木和孝氏が、「参加型改善活動によって小企業事業場の良好実践をどのようにサポートしていくのか」との基調報告を行い、仲尾氏が「メコンデルタプログラム 10 年の発展」と題して、この 10 年の歩みを、トンタット・カイ カント医科大学長が「参加型改善活動」の理論を概括した。

その後、ベトナムの工場や農民の写真を使った技術セッション当てゲームや、マヒドン大学サラ・アルフォン准教授とチェンマイ大学ワンペン・ソンハウ氏が、「どのように参加型改善活動を展開するのか」や、「良好事例の意味の説明」などの講義を行い、夜は歓迎パーティが開催された。

23 日午前はソンハウ農場に行き、グループに別れて、明後日からの農民への環境保護トレーニングの良好写真を集めた。午後はカント市内の中小企業の工場を訪問、見学した。24 日は、会場をカント医科大学近くに新たに出来たリゾート施設に移して、グループごとに写真の選定と技術セッションの練習を行なった。

技術セッションには必ず、参加者の理解を助けるために、その技術領域を象徴的に説明するゲームやパフォーマンスを事前に入れる。今回は環境保護に特化した新しいトレーニングなので、それにあわせていろいろなパフォーマンスを考案した。グループ 2 は水の節約についての寸劇、グループ 3 は、古雑誌を使わず入れ作り、グループ 4 は、ゴミ分別ゲーム、グループ 5 は卵運びゲームのニューバージョンを用意した。

25 日と 26 日はいよいよ各グループで作り上げたトレーニングを農民の前で披露した。農民の夫婦はそれから学んで、最終的に自分たちの改善計画を作って発表する。各グループの持ち時間は 30 分で、農民たちのグループ討議を含むと約 60 分で、1 テーマの課題をこなす。課題を達成したグループは、会場となった人民委員会の庭で写真を取りチームワークで達成した成果を喜び合った。

農民へのプレゼンテーションは、やりっぱなしだけではない。午前、午後の各セッションが終わった後に必ず評価会議を行う。これは、メコンデルタトレーニングの大きな特徴で、そのときに行った活動を全員で評価して、次の行動につなげるのが特徴である。今回のメコンデルタ 2010 では、ソンハウ農場から参加した農民は環境保護の重要性を学び、アジア各国から参加したトレーナーは参加型改善活動の運営を同時に学んだ。

9. 国際シンポジウムの開催

27 日はメコンデルタ国際研修ワークショップが 10 回目という節目を迎えたことを記念し、国際シンポジウムが開催された。ニンキウホテルのホールにベトナムを初め、

表2 メコンデルタ 2010 のスケジュール

日時	内容	報告者等
8月22日	PAOT 理論学習	
	基調報告	小木和孝
	メコンデルタプログラムの経過	仲尾豊樹
	農業における労働安全衛生と環境教育の PAOT の実践	カイ (カント医科大)
	PAOT で実施する入門ゲーム	高橋悦子ほか
	チェックリストとは	仲尾豊樹
	ローコスト改善について	トアイ (ECHO)
	良好事例の投票 (参加者による)	バンベン (チェンマイ大)
	PAOT ワークショップの組織の仕方	サラ (マヒドン大)
	ウェルカムパーティー	
8月23日	ソンハウ農場の農家訪問	
8月24日	良好事例写真の整理	
	カント博物館見学	
	メコン川視察ツアー・ナイトクルーズ	
8月25日	PAOT ワークショップ (1日目)	
	アクションチェックリスト入門とグループ討議	グループ 1
	セッション 1 廃棄物の減量化	グループ 2
	セッション 2 廃棄物の再使用と再利用	グループ 3
8月26日	PAOT ワークショップ (2日目)	
	セッション 3 安全な廃棄物管理	グループ 4
	セッション 4 地域の協働と組織化	グループ 5
	アクションプランの作成と農民の参加	グループ 6
	参加者全員による郷土料理の夕食	
	各国参加者の交流会・活動報告会	中地が報告
8月27日	第10回メコンデルタ記念国際シンポジウム	
	基調講演 1	小木和孝 (ICOH 会長)
	基調講演 2	チャラム・チャイ (マヒドン大学教授)
	報告 1 ILO 東アジア事務所	川上剛
	報告 2 東京労働安全衛生センター	仲尾豊樹
	報告 3 カント医科大学	カイ
	各国参加者からの報告 日本, 韓国, タイ, バングラディシュ, 香港, カンボジア	
	グループ討議 PAOT の持続的性と応用について	
	フェアウェルパーティー	

日本、韓国、香港、タイ、カンボジア、バングラディシュからの参加者を加え、約80名の人々が参加した。シンポジウムのためにタイからは、マヒドン大学のチャラム・チャイ教授とタイ厚生労働省スティーダ博士が、韓国で参加型安全衛生活動を進める、韓国安全衛生公団のパク・ジャンスン博士、大韓産業衛生財団のリー・ミュンスク部長、順天郷大学亀尾病院のクック・ヒエンウー博士が招待講演者として参加された。国際シンポジウムの講演内容については表2に示すとおりである。

この国際シンポジウムの目的は、10年間の各国での参加型安全衛生活動の発展と、そのルーツがメコンデルタ国際研修プログラムにあることを再確認し、メコンデルタ地域での労働者教育の発展に寄与することであった。

さらに、これから10年間、同様の自主対応型労働者教育プログラムの開発を実施し、メコンデルタ国際研修ワークショップを継続していくことを確認するグループ討議を行った。

10. WIPE 2005 の経験（中地の報告の要約）

今回のメコンデルタ2010で、アジア各国からの参加者の交流が行われた。その際に中地が報告したWIPE2005の経験についての報告要旨は下記の通りである。

1992年の地球環境サミット以来、地球環境問題の解決のために、世界各地で取り組みが行われてきた。この動きは、先進国だけでなく、開発途上国でも熱心に取り組まれている。ECHOと東京労働安全衛生センターでは、PAOTプログラムを開発する中で、カント市工業地区労働者への環境保護教育の必要性や、事業場における環境保護方針や化学物質等に関する記録・保存の整備が必要だと気づいた。そのため、カント市の主要な工業地区において発生する可能性がある環境問題のリスクアセスメントを実施することにした。10年以上続けられてきた自主的・自律的な参加型改善活動＝WIND (Work Improvement in Neighbourhood Development) や WISE (Work Improvement in Small Enterprises) をもとに、環境問題に焦点をあてた参加型トレーニングを開発した。工業地区の環境問題に焦点をあてた自主的・自律的な参加型環境保護教育を開発し、普及する取り組みが2005年から開始された。参加型環境保護プログラム＝WIPE (Work Improvement for Protection of Environment) としてまとめられた。

このプログラムは、ILO-2001による労働安全衛生マネジメント活動をベースにして、企業の中で環境保護方針の策定を推進し、環境に影響する化学物質等の記録することなどが組み込まれている。

2005年9月に、筆者は農薬工場の農薬の分包作業とソウハウ共同農場での農薬散布時の農薬の気中濃度の測定を行った。農薬使用によるリスクアセスメントを行うための基礎資料として、使用実態を把握する調査を行った。固体捕集用のセップパック

PS-2 というカートリッジにポンプで空気を吸引させて、日本に持ち帰り、GC-MS で濃度を測定した。表 1 (略) に測定結果を示す。ソウハウ共同農場では、マンゴの木 の殺虫剤の散布時に気中の農薬濃度が高いことが分かった。MBPMC という殺虫剤であるが、日本産業衛生学会の許容濃度の $5\text{mg}/\text{m}^3$ を超えることが確認された。毎日 行う作業ではないとはいえ、問題になる濃度である。作業姿勢として、散布用のスプレーのノズルを上向きにしてマンゴの木にかけるため、ヘルメットに雨合羽を着ていても農薬のしぶきを浴びてしまうのは非常に危険だと思う。散布作業を行う農民は素足なので、問題だと感じた。水田で稲への散布作業については、スプレーのノズルを下向きにして散布するため、それほど高い濃度ではなかった。

農薬工場では、分包している農薬以外のものも検出した。一日の作業中にも農薬の種類が変わるため、複数の農薬を検出するようである。

作業内容によってはきちんとした靴、安全靴などを履くべきである。農薬工場の業者や、ソウハウ共同農場の農民などはサンダル履きが素足なので注意を要する。

11. メコンデルタ国際研修プログラムの今後の展望

今回紹介したメコンデルタ国際研修プログラムは、アジア各地で、草の根で活動している労働安全衛生の活動家と産業衛生や産業医学の研究者によるアジア型の自主対応型労働者教育プログラムである。もともと PAOT は ILO が開発途上国の労働者教育のために開発したが、アジアにおいては工場労働者だけでなく、農民という未組織の労働者が多数いる。こうした労働者に対しての労働安全、労働衛生及び環境教育の必要性が認識され、少人数のグループによる自主対応型労働者プログラムが作成され、実践されていることは意義深いことである。

日本からの援助により、10 年間継続し、ベトナムの農民や中小工場の労働者のトレーニングとアジア各国から参加する活動家や研究者のファシリテーター養成を同時に行う教育プログラムはユニークな取り組みといえる。この二つの階層の違うトレーニングの手法は、日韓参加型改善活動ワークショップという形式で、4 年前から行われており、日本と韓国でも労働衛生、産業看護関係者によって行われている。

今年度はメコンデルタ 2011 ということで実施されたが、ソウハウ農場に併設された Tran Ngoc Hoang 高校の高校生を対象に環境教育研修プログラムをカント医科大学の協力を得て、実施した。トレーニングキットは 30 項目で、学校環境、家庭環境、地域環境の 3 分野に分けて、高校生自らが実現可能な、ローコスト改善に焦点をあてて作成され、筆者もプログラムの開発企画者として参加した。

About the PAOT (Participatory Action-Oriented Training) in the Mekong delta region—the report of Mekong delta 2010 international training

Shigeharu NAKACHI

Can Tho City of the Socialist Republic of Viet Nam ECHO (Center for Occupational Health and Environment Can Tho Health Department) has been educating the participation type of worker whom the International Labor Organization is advocating for ten years with the cooperation of the Labor Science Institution and the Tokyo Labor Safety Hygiene Center in Japan. The participation type labor safety hygiene education to which the spread activity was promoted was developed, and it developed, and the participation type worker environmental education program that was called program WIND (Work Improvement in Neighbourhood Development) and WIPE (Work Improvement for Protection of Environment) for the labor education for the farmer who had taken root in the region was developed.

The international training workshop in which the researcher with the industrial medicine and the occupational health and activist etc. of the labor union participated from neighboring countries (South Korea, Hong Kong, Thailand, Cambodia, Laos, Bangladesh dish, and Japan, etc.) has been held every year.

The author participated in 2010 Mekong delta international training workshop held August in 2010. The international symposium was held as the tenth anniversary in holding the 10th and international training workshop business, and the summary of the activity and the discussion concerning the development in the future were performed. Moreover, there was an experience of cooperating in the development of the WIPE program in 2005, too and the chance of the report was given to the author this time. The passage of the participation type worker education program in the Mekong delta region is brought together, it introduces the content of Mekong delta 2010, and it reports on the plan and the view in the future.